ゼブラ

ＯＮＥＯＲ８　公演上演台本

作／演出　　田村孝裕

登場人物

須藤康子　（３８）　長女
手塚薫　（３６）　次女
手塚奈央　（３３）　三女
早川美晴　（３１）　四女

須藤由起夫（４１）　長女の夫
梨田正順　（４０）　次女の婚約者
早川修　（３１）　四女の夫

浅野弘　（３１）　四女の同級生

所美和子　（年齢不詳）浮気相手

柿沼紳一郎（４０）　葬儀屋／兄
柿沼謙二郎（３９）　葬儀屋／弟

母　（３３）

古くからある木造の一軒家、その居間である。
中央に座卓、その奥には茶箪笥が置かれ、廊下へと通じる襖がある。下手にはテレビ、上手には縁側と小さな庭。
居間の向こうは廊下。上手から玄関、階段、台所が見えている。
さらに進むとトイレや風呂、母の寝室がある様子。
特徴的なのは家の壁が取り払われていること。目隠しとなる家具や扉、襖以外は、客席から家内が見渡せるようになっていて、役者は壁があるものとして演技する。
後に出てくる「＊」は同時に言う台詞。
まだ姉妹が幼かった頃……。
パジャマ姿の康子、薫、奈央、美晴がテレビを見ている。
美晴はひとりウトウトしていて……。
テレビから流れているのは懐かしい歌謡曲。姉妹たちは釘付けである。
しばらくして洗い物を終えた母が居間へ来てテレビを消す。

康子・薫・奈央　あっ……。
薫　なんで消しちゃうのぉ！
母　もうおしまい。
康子　あたしまだ眠くないもん！
薫　薫だってそうだよ！
母　美晴。トイレ行ってきな。
美晴（あくびして）はーい。

美晴はトイレへ。

母　奈央は歯磨いたの？
奈央　磨いたよ。
母　じゃ「はー」してごらんなさい。
奈央　はー。
母（臭って）よし。
奈央　ママ、奈央もテレビ見る。

康子　奈央は早く寝なよ。
母　お姉ちゃん、いいこと言った。
奈央　それでお姉ちゃんたちだけテレビ見るんでしょ。
康子　そうだよ。
母　ダメ。あんたたちほっといたらずっと見てるんだから。
奈央　やだぁ！奈央もテレビ見る！
母　奈央はもう寝るの。
薫（こっそりテレビを点けようと）
母（それを制して）薫！あんた、コソコソしようたって無駄よ！
薫　もうやだ！奈央たちいるとすぐテレビ消されちゃう！
母　お姉ちゃんたちは宿題やっちゃいなさい。
康子　あたし終わったもん。
薫　薫も。
康子　うそ。後で算数教えてって言ってたじゃん。
薫（バラすな）シー！シー！
美晴（声）ママー！ママー！
母　はいはい。

母はトイレに向かう。

薫（奈央に）バーカ。
奈央（薫を叩いて）
薫　イッタイ。もうすぐ叩くんだから。

と薫はやり返して奈央もやり返す。その叩きあい。

康子　やめな。お父さんに言いつけるよ。
薫　だって奈央が先、ぶったんだよ。
奈央　言えばいいじゃん。
康子　いいの？奈央。せっかく金賞取ったのに、お父さんに怒られて。
奈央　……。
康子　いいの？自慢したいんでしょ？

奈央（泣きそうなのを我慢している）……。
薫　出た。もう、すぐ泣くんだから、奈央は。
奈央（我慢して）泣いてないもん、別に。

母が美晴を連れ、二階へ向かおうとする。

康子　ねえ。お父さんまだ帰ってこないの？
母　……。

おもむろにテレビを点ける母。

薫　え、いいの？！
母　うん。今日だけね。
薫　やったー！
母　美晴は？寝る？
美晴（ウトウトしつつ）ううん。美晴も見る。
母　ん。おいで。

美晴は母に寄り添い座る。

母　これ（番組）終わったら宿題やっちゃいなよ。
薫　わかってる。
母　お姉ちゃんも。薫に算数教えてあげんだからね。
康子　えーやだ。だって８の段も言えないんだもん、薫。
母　そうなの？
康子　そうだよ。何回言っても覚えられないんだから。
母　ねえ薫。ちょっと言ってごらん、８の段。
薫　え、今？
母　今。
薫　ハチイチが８、ハチニ１２、ハチサン２１、ハチシ３４、ハチゴ４５、
　ハチロク４９、ハチシチ５７、ハッパ８８、ハック４７。
母　ハチイチだけね。まともなの。

康子　最後に減る意味がわかんないよね。
母　そんなんじゃ誰もお嫁にもらってくれないよ。
薫　タケシくんがもらってくれるって言ってたもん。
康子　そんなのね、幻なんだよ、薫。

近所の犬が吠える。

奈央　あ！お父さん帰ってきた！

と奈央はすぐさま立ち上がり、父を出迎えに玄関へ。
それを目で追う母。

母　……。
薫　そういえばさ、タケシくんから聞いたんだけど、東京タワーってまだ完成してないんだって。
康子　そんなわけないじゃん。
薫　なんかね、まだ骨組みの段階らしいよ。
康子　あんたいじめられてんじゃないの？ウソ教えられてんだよ。
薫　違うよ。だって骨組みの段階だって言ってたもん。
康子　じゃあこれからどんどん壁が出来てくるわけ？
薫（テレビを見ながら）らしいね。
康子　んなわけないじゃん。そしたらサンシャインよりでっかくなっちゃうよ。
薫　らしいね。
康子　んなわけないじゃん。
薫　らしいね。
康子　ちょっとあんた聞いてんの？
薫　らしいね。あ、そういえばさぁ、タケシくんから聞いたんだけど―

父は現れず、しょげている奈央。
暗転。

現在。晴天。昼過ぎ。
薫が座卓の前でなにやらボーっと座っている。
電話に出ている奈央はなにやら怒っている様子で、

奈央　もういいですか？ウチはお世話になることはありませんし結構ですから
……もう迷惑なんです。切りますね。（と受話器を置く）

奈央は傍らにあった掃除機を手にすると、

奈央　ちょっと早くしてよ。自分のことでしょ？
薫（心ここにあらずで）わかった。今行く。

二階へ上がる奈央。
しかし薫は全く動こうとしない。

薫（ため息混じりに）うーん……。

それから座卓に頬杖をつき、目を瞑る薫。
しばらくして庭のほうから由起夫がやってくる。

由起夫　薫ちゃん。
薫（寝息を立て）
由起夫　……寝てるわ。

由起夫は自分の靴を手に居間に上がり込むと廊下へ出て、

由起夫　おーい……（二階に）おーい。

そこへ同じく庭からバインダーを持った浅野が現れる。

浅野（薫に）あ、こんにちは。
薫（眠っている）……。

浅野（薫に）こんにちは。
薫　……。

由起夫は玄関に靴を置くと居間へ戻って、

由起夫　いないみたいですね、奈央ちゃん。
浅野　あの……どちら様ですか？
由起夫　僕あの、奈央ちゃんの一番上の姉の夫です。
浅野　……初めまして。浅野です。
由起夫　初めまして。えっと（薫を指し）ご存知ですか？
浅野　はい、ご存じです。２番目のお姉さん。薫さん。
由起夫　あ、姉妹（キョウダイ）みんな知ってるんですか？
浅野　はい。オサナジミなんで。
由起夫　え？
浅野　オサナジミなんで。
由起夫　……あ、そうでしたか。
浅野　近所付き合いも激しくやりあってるんで。
由起夫　それは失礼いたしました。
浅野　いいえ。
由起夫　……どうしようかな。上がっちゃいます？そこで待ってるのも、なんですし。
浅野　いえ。結構です、ここで。
由起夫　そうですか？
浅野　はい。僕のことは、お気に召さないでください。
由起夫　いや、特には……。
浅野　え？
由起夫　特に、お気に召したわけでは……。
浅野　はい？
由起夫　とりあえず、上がって待ってたらいかがですか？
浅野　え、何なんですか？何する気ですか？僕をどうする気ですか？
由起夫　別に何をする気もないんですけど……。

奈央が階段から現れ居間へ。

浅野　あ、こんにちは。あの、この前お願いしたサインを。（バインダーを渡す）
奈央（受け取って）はいはい。（由起夫に）来てたんですか？
由起夫　うん。さっき。
奈央（サインしつつ）お姉ちゃんと一緒だと思ってましたよ。
由起夫　ごめん。昨夜ちょっと遅かったからさ。まだ病院？
奈央　ええ。（浅野に）美晴来るよ。これから。
浅野　はい。
奈央　聞いてた？
浅野　聞いてたっていうよりか、伺い知れておりました。
奈央　どういう意味？
浅野　いや、まあ、ちょっと。
奈央　これ、薫ちゃんも書いたほうがいいよね？
浅野　あ、お願いします。
奈央（薫を叩き）ちょっと。なに寝てんの。
薫（目を開け）寝てないよ。ちょっと考え事してたの。（と由起夫に気づき）あ、
　由起夫さん、来てたの？
由起夫　寝てたろ？完全に。
浅野　あ、こんにちは。
薫（浅野に手を振り）あー、ぽんちゃん。
奈央　ちょっとこれ書いてよ。
薫　え？（とバインダーを確認）
浅野　よろしくお願いします。
奈央　書いたら動き出してよ。
薫　もういいよ、後で。
奈央　そういうわけにはいかないの。
薫　あたし、どっちの名前で書けばいい？
奈央　まだ手塚でしょ。
浅野　あ、あの、おめ、おめ、おめでどうございます。
薫（サインしつつ）ありがとう。
奈央　言わせてんじゃん。浮かれちゃって。

薫　言わせてないよ。自分がひがんでんじゃん。
奈央　そんなわけないでしょ。
由起夫（バインダーを見つつ）へー。パチンコ屋出来るんだ？
薫　っていうか、出来ないようにすんの。（書き終えて浅野に渡す）はい。
浅野（受け取って）ありがとうございます。あ、ました。
薫　ぽんちゃん家なんか目の前だもんね？
由起夫　どちらなんですか？お宅は。
浅野　え？ウチ来てなにするつもりですか？
由起夫　いや、行きませんよ、別に。
薫　オーロラ書店。そこの息子さん。
由起夫　ああ、はいはい。
奈央　こないだありがとね、お花。おばさんにお礼言っといて。
浅野　はい。
奈央　そういえば知ってる？母さん病室移ったって。
浅野　いいえ。
奈央　今ね、個室に入ってんの。ちょっと薬のせいで幻覚見るようになっちゃって。
浅野　ああ……。
奈央　それ、おばさんに伝えてくれる？面会は今ちょっとって。
浅野　わかりました。それじゃ、ごめんくださいませ。

浅野は庭を去る。

薫　あの子ね、昔、美晴にコクったことあんだよ。
由起夫　え、マジで？
薫「僕の義務教育は全て手塚さんに捧げてきました」って言ったらしいの。
由起夫　うわ。重。
薫　今はどうだかわかんないけど、美晴が結婚したときなんかさ―
奈央　ほら。いつまでも喋ってないで、早く上来てよ。
薫　いいよ。まーちゃん来てからで。
奈央　それじゃ間に合わないでしょ。
薫　じゃ間に合わなくたっていい。

奈央　そういうわけにはいかないでしょ。みんなわざわざ来てくれるんだから。
薫　……。
奈央　じゃあ引越しやめる？ずっと私と暮らしていくの？
薫　……。
奈央（立たそうと）ほら。立って。
薫（動かず）やだ！今、動きたくないの！
奈央（諦め）ほんと、わがままなんだから。
薫　……。
奈央　由起夫さん、なんか飲む？
由起夫　あ、冷たいお茶かなんかあれば。

奈央は台所へ。

由起夫　あとで病院行くでしょ？乗ってけば？俺の車。
奈央　いい。梨田さんに乗せてもらうから。
由起夫　あ、そう。
薫　あたし乗せてってよ。由起夫さんのに。
由起夫　え、なんで？
薫　だって酔うんだもん、あの車。
由起夫　なんでよ。何回も乗ってるくせに。
薫　いいから乗せてって。
由起夫　なに？なんかあった？
薫　なんもないけど、別に。
由起夫　じゃあ、どうして？
薫　お姉ちゃんから聞いてない？あたしのこと。
由起夫　ううん。なんも。
薫　やっぱ信じてないんだな。
由起夫　え？なにを？
薫　笑わない？
由起夫　笑わせなければ。
薫　いや由起夫さん絶対笑うな。
由起夫　わかったよ。笑わないよ。

薫　絶対？
由起夫　絶対。
薫　……なんかね、マリッジブルーみたい。
由起夫（笑いをこらえ）……へー。
薫　笑ってるよね？
由起夫（ごまかして）笑ってないよ。
薫　じゃ我慢してんの？それ。
由起夫　笑ってないよ。見てよ。この真剣な目を。

由起夫はまじめな顔をし、薫はそれをまじまじと見る。

由起夫（耐え切れずに顔を背ける）
薫　絶対笑ってんじゃん。

奈央が玄関へと向かいながら、

奈央　なんもないから、ちょっと買ってくるね。
由起夫　あ、奈央ちゃん。いいよ、別に。何でも。
奈央　マイクロダイエットになっちゃうけど。
由起夫　……じゃあお願いしようかな。

奈央は玄関を出て行く。

由起夫　なんか今日、怖くない？奈央ちゃん。
薫　だとしたら由起夫さんのせいだよ。
由起夫　なんで俺が？
薫　由起夫さん、浮気したんだって？
由起夫　え？なにそれ。
薫　聞いたよ。お姉ちゃんから。
由起夫　いやしてないよ。してない。あれあいつの勘違いだもん。
薫　そうなの？
由起夫　それで怒ってんの？

薫　もうカンカンだよ。
由起夫　マジで？
薫　マジで。
由起夫　相当？
薫　怒ってたねぇ。だってお姉ちゃんがなだめるくらいだもん。浮気されてる方なのに。
由起夫　だから、してないってば。
薫　でももう解決したんでしょ？
由起夫　そりゃそうだよ。やましいことないもん。
薫　ま、奈央の誤解は解いといたほうがいいね。
由起夫　そっか。わかった。
薫　っていうかさ、そんな話を聞かされたあたしの心配してよ。
由起夫　ええ？
薫　結婚前の微妙な時期に。
由起夫　だって俺悪くないじゃん。

ここへ庭から浅野が戻ってきて、

浅野　あ、あの、
薫　ん？どした？
浅野　手塚さんって、何時ごろこっち来るんですか？
薫　もう着くと思うよ。
浅野　早川も？あ、旦那さんも。
薫　うん。美晴になんか用？
浅野　いえ結構です。ごめんくださいませ。

と浅野は逃げるように去る。

由起夫　え？なんだろう？
薫　あたしの話、まだ終わってないんですけど。
由起夫　あ、ごめん。なに？
薫　あたしさ、ちょっと痩せたと思わない？

由起夫　まあ、言われてみれば。
薫　でしょ？
由起夫　すごいね、マイクロダイエット。
薫　あたしあれまずくて飲んでないもん。
由起夫　じゃあ、なんで？
薫　いや、だからさ、マリッジブルーで。
由起夫（ついに笑ってしまい）
薫　ほら。やっぱ笑ってんじゃん。
由起夫（笑いつつ）だって笑わすから。
薫　笑わす気、全くないんですけど！
由起夫　……ごめん。
薫（怒り）……。
由起夫　ごめんごめんごめん。わかった。まじめに話す。
薫　もういい。
由起夫　そういうときもあるよね。そうなるよ、どうしようもなく。
薫　……。
由起夫　いや、わかんないけどね。俺、女じゃないし。
薫　……。
由起夫　ごめんって。もう笑わないから。
薫　まあいいけどさ。笑われんのはわかってたし。
由起夫　あれじゃない？なんか全然違うこと考えたら？不安がガーっと襲ってきたら。
薫　考えるようにはしてるよ。
由起夫　例えば？どんなこと？
薫　だから、一流大学出身の人って、何で大学名を言う前に「一応」って言うのか、とかさ。
由起夫　え？
薫　「一応、早稲田です」みたいな。
由起夫　ああ……。
薫　あとは反復横飛びしてると、なんで前の人がどんどん自分に迫ってくるのか、とかさ。
由起夫　ああ……。

薫　それか、寝るか。
由起夫　……薫ちゃん、幸せだね。
薫　そんなことないよ。マジで辛いんだから。

ここへ康子、美晴、早川が玄関から入ってくる。

康子　ただいま。
由起夫（廊下に顔を出し）おかえり。
康子　あれ。早かったじゃない。
由起夫　うん。道、結構空いてたからさ。
早川　こんちはっす。
由起夫（美晴と早川に）よかったね。おめでとう。
美晴（そっけなく）ありがと。
早川　ありがとうございます。

康子は台所へ。美晴と早川は居間へと入る。

早川（薫に）どうも。
薫　ごめんね。わざわざ。
早川　いや、とんでもないっすよ。
由起夫　聞いたよ。予定日が早川くんの誕生日なんだって？
早川　そうなんですよね。
由起夫　すごいね。合わせたんだ？
早川　いやたまたまっすよ。たまたま。
康子　××（旬の果物）買ってきたからさ、今、食べない？
美晴　あたし、いらない。
薫　あたし、いる。
康子　じゃあ、梨田さん来てからにしようか。
薫　あたし「いる」って言ってんじゃん！
康子（答えず）
薫　無視かよ。

美晴はとっさに立ち上がり、トイレへ。ドアを閉める音。
その美晴を目で追いつつ、居間に入る康子。

康子　さっきさ、母さんボケちゃったの、初めて目の当たりにしたから。
由起夫　ああ。そっか……。
康子　自分のことわかってもらえなかったのがちょっとショックだったみたい。
早川　すいません。なかなか来れなくて。
康子　仕方ないよ。遠いんだもん。

薫は立ち上がってトイレへ。

康子　びっくりしたでしょう？
早川　ああ。まあちょっと。
薫（声）ちょっと美晴。あんた泣いてんの？
康子　薫。ほっときなさいよ。

薫、出てきて、

薫　あたしおしっこしたいんだけど。
康子　ちょっと我慢してあげてよ。
薫　ったく。（とまた元の位置へ）
康子　今日はね、床が全部はんぺんだったみたい。
薫　あ、ほんと。
康子「はんぺん敷いてるから、ふわふわするね」だって。
薫　……。

ここで由起夫の携帯が鳴る。着信履歴を確認して、

由起夫　もしもし。あ……ちょっと待ってください。

由起夫はどこで話そうか迷いつつ玄関を出る。

康子　今度の原因はなんなの？
早川　別にたいしたことないっすよ。
薫　なに？またケンカしてんの？
早川　いやケンカっちゅーほどのもんでも。
薫　そういえばさ、（指差し）そこにパチンコ屋出来るらしいよ。
早川（嬉しそう）え、マジっすか？！
薫　食いつくと思った。
早川　いやいやいや行ってないっすよ、最近は。

美晴、居間に入ってきて、

美晴　早くしてきてよ。
薫　はいはい。あ、ぽんちゃんがあんたに用事あるみたいよ。
美晴　……。

薫はトイレへ。

康子　美晴さ、アンマンとか食べたくならない？
美晴　なに？いきなり。
康子　あたし妊娠してるとき、酸っぱい物じゃなくてアンマンばっかり食べたかったの。
美晴　だから？
康子　これ母さんの遺伝なのよ。
早川　あ、そうなんすか？
康子　母さんもあたしたち生むとき、アンマンばっかり食べてたんだって。
早川　へー。
康子　薫ん時は豚まんだったらしいけど。
早川（思わず止まり）……。
康子　冗談よ。面白くなかった？
早川　いや、リアクションできないっすよ。
康子　でもアンマンの話はほんと。

玄関からお茶などを買い込み、戻ってくる奈央。

奈央　早川くーん。車そこだとまずいかも。今パトカーウロウロしてたから。
早川　え、マジっすか？！
奈央　パーキングわかる？わかんなかったら由起夫さんに聞いて。
早川　おいっす。

早川は玄関から去る。
奈央は台所へ。お茶の用意を始める。

康子　……あんたんとこ、また車買い換えたんだね。
美晴　……。
康子　もうちょっと考えなさいよ。子供生まれんのに。
美晴　……。
美晴　……。剥いてよ。××食べるから。
康子　自分で剥きなさいよ。

水洗の流れる音。
美晴はすぐさまトイレへ。

薫（声）お待たせしました。

トイレのドアが閉まる。と、ノックする音がして、

薫（声）ねえ。後で手伝ってよ。落ち着いたら上来てくれる？
康子　ほっときなって、今は。

薫が居間へと戻る。

奈央　その前に自分が動きなよ。
薫　今やろうと思ってたの。
奈央　お姉ちゃん、お茶飲むでしょ？

康子　あ、頂戴。
薫　あたしも。（と康子に）まだパチンコやってるね、早川くん。
康子　ま、それでケンカしてんでしょ。

奈央はお茶を２つ持って居間へ。１つは康子の前へ。

康子　サンキュ。
薫　あたしのは？
奈央　自分で動いたら？
薫（康子に）ちょっと頂戴。
康子　ダメ。早く準備しちゃいなさい。手伝ってあげるから。
薫　頂戴よぉ。
康子　あの人、病院行くって？
奈央　みたいなこと言ってたけど。
康子　ああ、ほんと……。（と薫にお茶を出してやる）
奈央　なんで？
康子　あんま行きたがらないのよ。母さんがああなってから。
薫　まあ由起夫さん優しいからね。見ないようにしてくれてるんでしょ。
奈央　美晴、またこもってんの？
康子　そう。
奈央　あれは治んないね、一生。
康子　でもしっかりしてもらわなきゃ。みんな覚悟は決めてんだから。
奈央　……。
薫　……。最近さぁ、便秘しちゃってんの、あたし。
康子　あら。珍しいじゃん。薫にしては。
薫　そうなの。多分マリッジブルーのせいなんだけど。
奈央　そんなわけないでしょ。

暗転。

姉妹がまだ幼かった頃……。夜。
パジャマ姿の美晴が母の膝枕でぐっすり眠っている。
母はテレビで流れていた歌謡曲を歌っていて……。
台所では康子と奈央が夕飯の後片付けをしている。
それから薫が座卓を拭きに居間へ。

母　ありがとね。
薫　いいのいいの。お母さんはゆっくり休んでて。
母　休んでるよ、十分。
薫　でも、これからお仕事でしょ？
母　うん。でもまだ時間あるし。
康子　お風呂、入っちゃえばいいじゃん。
奈央　そうだよ。そうして。
母　そう？じゃあ、そうさせてもらおうかな。
薫　ほら。美晴。
母　いいのいいの。起こさないで。

母は美晴を起こさないように膝枕を外す。

母　じゃあ、お願いね。
薫　ごゆっくり。

と母は風呂場へ。

薫　ねえ。ケーキ食べたくない？
康子　何ケーキ？
薫　チョコレート。
康子　あたし普通のがいい。
奈央　奈央はチーズ。
薫　頼んだら買ってくれるかな？
康子　今日はもう無理だよ。
薫　えー、今日食べたい。今食べたいんだもん。

奈央　今ご飯食べたばっかじゃん。
薫　だって、食べたいんだもん。

洗い物を終え、姉たちは居間へ。
すると起き上がる美晴。

美晴　ねえ？ママは？
薫　美晴、ケーキ食べたくない？
美晴　食べたい！あんの？
薫　ない。だから買いに行こうよ。
美晴　うん。美晴も行く。
康子　やめなって。ダメだよ。お店だって開いてないし。
薫　急げば間に合うもん。
奈央　アンデルセン？
薫　そうそう。（手を挙げ）はーい。ケーキ食べたい人。
奈央　＊（手を挙げ）はーい。
美晴　＊（手を挙げ）はーい。
薫　ほら。3対1だよ。3対1。
康子　今日、お父さんの誕生日だから？だから食べたいの？
薫　……。
奈央（手を下ろし）……。
美晴　……。
康子　……。
美晴　ねえ。ママは？
康子　お風呂。

美晴は風呂場の方へ。

康子　美晴も入っちゃいな。
美晴（声）うん。
薫　……。
奈央　あたし、いらない。ケーキなんか。

康子　今日は泣かないじゃん。珍しく。
奈央　もう泣かないもん。
康子　……。
奈央　絶対泣かない。
薫　……。
康子　薫も我慢しな。
薫　うん……。

少し間。
美晴が戻ってくる。

康子　どうした？
美晴　ママがケーキ買っていいよって。（と2千円を見せる）
薫　聞こえちゃったかな？
康子　もう！声大きいんだよ。
薫　でも、ま、いっか。
康子　良くはないでしょ。
美晴　ママいらないって。美晴プリンね。

美晴は風呂場へ去る。

薫　いこ。お姉ちゃん。
康子　ちょっと待ってよ。着替えるから。
薫　ダメだよ。閉まっちゃうもん。
康子　やだ。恥ずかしい。
薫　じゃ奈央いこ。
奈央　あたしいらない。
康子　……。
奈央　食べたくない。

奈央は二階へいそいそと上がる。

薫　もういいよ！ひとりで行ってくるから！
康子　わかったよ！急いで着替えるから！
薫　早くー！

と康子も二階へ。

薫（待ちきれず）早くぅ！

と薫も二階へ上がる。
照明はゆっくりと変化し、現在の日中へ。
誰もいない部屋にインターホンが鳴る。間があってもう一度。

紳一郎（声）すいませーん……すいませーん。
謙二郎（声）……いないのかな？
紳一郎（声）いや、いるだろ。さっき電話出たんだから。

玄関の扉を開ける謙二郎。

謙二郎（声）あ、開いてる。

紳一郎は咄嗟に扉を閉め、

紳一郎（声）ばか。やめろって。
謙二郎（声）いるな。確実に。
紳一郎（声）そうだとしても、勝手に開けるのはまずいだろう。
謙二郎（声）もう一度、鳴らしてみ。

紳一郎はインターホンを押す。

紳一郎（声）すいませーん……すいませーん。
謙二郎（声）鳴ってる？インターホン。
紳一郎（声）え？

謙二郎（声）ちょっと確認してみ。俺、押すから。
紳一郎（声）わかった。

玄関扉を開き、紳一郎が顔を出す。
謙二郎がインターホンを押す。
紳一郎が音を確認。扉を閉めて。

紳一郎（声）鳴ってる鳴ってる。
謙二郎（声）兄貴も開けてんじゃん。
紳一郎（声）お前が確認しろって言ったんだろ。
謙二郎（声）バカ。ちょっと開けて、耳を澄ませばいいだろ。
紳一郎（声）耳を澄ますだけだったら自分でインターホン押せたよ。
謙二郎（声）俺は耳を澄ますことに集中してほしかったんだよ。
紳一郎（声）インターホン押しながら耳を澄ますことぐらいできるっつーんだよ。
謙二郎（声）……。
紳一郎（声）インターホン押しながら耳を澄ますことぐらいできるっつーんだよ。
謙二郎（声）なんで2回言うんだよ。なんで2回言うんだよ。
紳一郎（声）じゃあ、お前が耳を澄ませば良かっただろ。耳を澄ませば？
謙二郎（声）何回耳を澄ませばいいんだよ。
紳一郎（声）……そういえば、そんな映画あったな。
謙二郎（声）はあ？
紳一郎（声）「耳を（思い出そうと）……澄ますだけ」みたいな。
謙二郎（声）知らないけど。
紳一郎（声）いや違うな。なんだっけな。
謙二郎（声）そんなの映画の題材になんの？
紳一郎（声）え？
謙二郎（声）2時間も耳を澄ましてるだけで。
紳一郎（声）なるんだろ。知らないけど。
謙二郎（声）見たくねー。
紳一郎（声）なんだっけな……。

謙二郎（声）おい、そんなことはいいんだよ。どうすんだよ？

ここへ美晴が階段から降りてきて玄関を開ける。
紳一郎と謙二郎は多少驚いて。

紳一郎　……こんにちは。
謙二郎　こんにちは。
美晴　はい？

スーツ姿の紳一郎と謙二郎が入ってくる。

紳一郎　私、あのー先ほどお電話させていただいた、柿沼葬祭のものなんですけれども……奈央さん、でいらっしゃいますか？
美晴　いえ。違いますけど。
謙二郎（名刺を出し）私ども、こういう者でございまして。
美晴（受け取り）あ、はい。
紳一郎（あわてて名刺を出そうと）
美晴　葬儀屋さんですか？
紳一郎（なかなか名刺が出ず）はい。お母様のことについて、ちょっと。
美晴　ウチまだ亡くなってませんけど。
紳一郎　ええ。それは承知しております。（まだ出ず）
美晴　あたしちょっとわからないんで姉と話していただけますか？今いるんで。
紳一郎（まだ出ず）あ、あ、いや、あの、

美晴は階段を途中まで上がり二階に、

美晴　奈央ちゃん！ちょっと！
謙二郎（小声で紳一郎に）おい。
紳一郎（まだ出ず）わかってるよ。

奈央出てくる。
柿沼兄弟は体を強張らせ、

美晴　なんか、葬儀屋さんだって。
紳一郎　あの、先ほどお電話させていただいた柿沼葬祭でございます。
奈央　帰ってください。お話しすることは何もありませんしご相談することもありませんから。
紳一郎　いや、ですからですね―
奈央　ですからも何もないんです。帰ってください。
謙二郎　何か、誤解されてるようなんで―
奈央　失礼じゃないですか？何ですか？自宅まで押しかけてきて。
紳一郎　ちょっと聞いていただけませんか？
奈央　迷惑なんです。帰ってください。
紳一郎　あのお母様がですね―
奈央　帰ってください！何回言わすんですか？帰ってください！
紳一郎　……。
謙二郎　……。
紳一郎　……いや疑われているのは―
奈央　美晴。塩持ってきて。
美晴　別にそこまでする必要なくない？

奈央はいそいそと台所へ。

美晴　……え？何なんですか？
謙二郎　別に怪しいものではないんですけど―
紳一郎　私たち、あの、お母様から―

奈央は玄関に戻るなり、葬儀屋に塩を振りまく。
そこへ康子と薫が駆けつける。

奈央　帰ってください。
謙二郎（怒りを押さえ）失礼しますっ。
真一郎（頭を下げ）失礼いたしました……。

二人は玄関を出て行く。

康子　どうしたの？
奈央　葬儀屋よ。何度も電話してきた。（塩を台所に戻す）
康子　あ、ほんと。
薫　そういうのさぁ、どっから調べてくんのかね？
美晴　ほんとだよ。
奈央　……。
康子　まあ、そろそろ考えてもいいのかもね、そういうこと。
奈央　そういうこと？
康子　お葬式なんて出すの初めてだし、女ばっかでお金のことだってあるし。
奈央　あの人たちと一緒だね。お姉ちゃんも。
康子　そういう言い方するの、やめて。
奈央　お母さんがかわいそうだと思わないの？
康子　そりゃ思うよ。思うに決まってんじゃない。
奈央　じゃあそんなこと口にしないで。
康子　しょうがないでしょ。そういう時期に来てるんだから。
奈央　……覚悟はしてるよ。してるけどさ―
康子　あんただって母さんいなくなったら一人になっちゃうんだよ。この家のことだって―
奈央　もういい。聞きたくない。
康子　どこが悪いのよ？お葬式のこと考えてあげるのが。
奈央　……。
薫　まあ、こんな狭いとこで話してててもなんだからさ。
奈央　……。
康子　……。
薫　奈央の気持ちもわかるし、お姉ちゃんの言うことも正しいと思うけど……。
美晴　死なないよ。そんな簡単に死んじゃう母さんじゃないでしょ。
奈央　……。

奈央は黙って二階へと上がる。

康子　ちょっと奈央。

追いかける康子と薫。
美晴も二階へ上がろうとすると、

浅野（声）手塚さん。手塚さん。

声に気づき、美晴は慌てて台所へ。

美晴　あんた、いつからいたの？
浅野　今、勝手口から。
美晴　勝手に入って来んなよ。
浅野（笑って）手塚さん、さすが。今のダジャレ。
美晴　は？違うよ。
浅野　だって勝手と勝手が。
美晴　あんたさ、普通に玄関から入ってこれないわけ？
浅野　これないよ。だってまずいでしょ？逆に。
美晴　意味わかんないんだけど。
浅野（封筒を出し）残りのお金、持ってきたんだ。
美晴　なんでよ。あとで行くって言ったじゃん。
浅野　それじゃつまんないもん。
美晴　は？なに言ってんの？
浅野　こういうスリルから、物語は劇的になっていくわけだから。
美晴　それマンガの話でしょ？あたしはスリルとかいらないの。もうやめて。
　こういうの。
浅野　ごめん……ただ、早く渡そうと思って……。
美晴（封筒を奪い）ありがとう。これ、なるはやで返すから。
浅野　別にいつでもいいよ。それより体、大丈夫なの？
美晴　別に……大丈夫だよ。
浅野　もう言ったの？早川には。あ、旦那さんには。
美晴　ううん。まだ。
浅野　そっか……。

ここへ庭から所がやってきて、縁側に座る。

浅野　僕から言おうか？旦那さんには。
美晴　は？いいよ。
浅野　遠慮しないで。手塚さん言ってたでしょ？僕しか頼る人がいないって。
美晴　いや、そうだけど……。
浅野　手塚さんがそんなこと言ってくれるなんて、正直嬉しかった……。
美晴　とにかくあんたは何もしないで。話がややこしくなるから。

ここへ由起夫と早川が玄関へとやってくる。
美晴は慌てて、勝手口から浅野を追い出す。

早川　え、ガチっすか？
由起夫　うん。ガチガチ。
早川　え？お義姉さんが呼び出したの？
由起夫　ほんとに来るとは思えないけどさ。
早川　でも来ちゃったらどうすんですか？

由起夫の声に、いたずら心から笑みを浮かべる所。バッグから
チュッパチャップスを出し、なめる。
美晴は台所から出てきて、

美晴　あ、お帰り。
由起夫　あ、うん。（こっそり早川に）まあ、あとで。

由起夫は居間へ。
二階へと上がる美晴を早川が呼び止める。

由起夫（所の姿に）！！
早川　なあ。
由起夫（慌てて襖を閉める）
所（チュッパチャップスを）食べる？
早川　お前、まだあんな危ないヤツと連絡取ってんの？
由起夫　ほんとに来たの？

美晴　関係ないでしょ？あんたには。
所　来ちゃった。

美晴は逃げるように二階へ。
由起夫は所を帰そうと、

由起夫　とりあえずここだとあれだから。

早川が居間に入ってきて、

早川　？！
由起夫　！！
所　あーん。
由起夫（思わずチュッパチャップスをくわえ）
早川　ええ？
由起夫（口のチュッパチャップスを早川に差し出し）はい。
早川　いやいやいや。
由起夫　……。

由起夫はすがるように早川に抱きつく。

早川（事情がわかって）……リアルガチっすか……。
由起夫　とりあえず、襖閉めようか。
早川　あ、はい。

早川は由起夫を抱きかかえながら、襖を閉める。

所　だからほんとだって言ったじゃん。
由起夫　うん……。
所　驚かさないようにしたつもりだったんだけどな。
由起夫　驚いてはいないよ。
所　あら。そう？

由起夫　今は誰かに頼っていたいんだ……。
早川　いや勘弁してくださいよ。
所　でもちょっと早く着いちゃった。もっと迷うと思ったんだけど、道案内上手だわ、奥さん。

由起夫は早川から離れ、

由起夫　なんで？なんで、こういうことになったの？
所　ね。
由起夫　「ね」じゃなくてさ。
所　じゃあ「ぬ」？
由起夫　「ぬ」でもない。今ちょっと、ふざけるのやめて。
所　ふざけてるのはどっち？あたし、奥さんいるなんて聞いてないんですけど。
由起夫　……。

また早川にすがる由起夫。

早川　いやいやいやいや。
所　しかも、子どもまでいるなんてさ。
由起夫　ごめんね、早川くん。今だけ。
早川　はあ……。
所　奥さんは？
由起夫　わかんない……。
所　あたし今日、なんで呼び出されたわけ？奥さんに。
由起夫　わかんないよ……。
所　……。
早川　あの、今日のところはお引き取り願えますか。親戚も集まってることですし。
所（由起夫に）来たことだけは伝えといてね。シカトしたみたいに思われんのイヤだから。
由起夫　……。
所　伝えといてね。

由起夫　……。
所　伝えといてぬ。
由起夫　……ぬ。

所は庭を去る。

早川　……何のプレイですか？今の。

由起夫は早川から離れ、座卓の前に座る。

由起夫（大きく息を吐き）ふー。
早川　そんな、爆弾処理するんじゃないんだから。
由起夫　うまいこと言うね。
早川　そうですか？
由起夫　確かに今、そんな気分だよ。
早川　なんで呼んだんですかね？お義姉さん。
由起夫　どっちかの線、切らなきゃいけないんだろうな、きっと。
早川　そういうことなんですかね。
由起夫　青を切ろうか、ブルーを切ろうか……。
早川　同じですよ。
由起夫　え？
早川　青とブルーって。
由起夫　俺、今なんて言った？
早川　だから、青とブルーって。
由起夫　同じじゃない。
早川　同じですよ。
由起夫　青とブルーって言いたかったんだけどな……。
早川　だから同じですよ。
由起夫　え？
早川　青とブルーって。
由起夫　俺、今なんて言った？
早川　だから、青とブルーって。

由起夫　同じじゃない。
早川　だから、同じですよ。
由起夫　青とブルーって言いたかったんだけどな……。
早川　だから……大丈夫ですか？
由起夫　うん。
早川　あれ、どっちがブルーなんですかね？

ここへ康子が二階から降りてきて居間へ。
咄嗟に平静を装う由起夫と早川。
康子はバックを取ると玄関へ向かう。

由起夫　どこ行くの？
康子　ちょっとダンボールもらってくるわ。意外と荷物多くて。
由起夫　別に、手ぶらでいいじゃん。
康子　まあ一応ね。

由起夫は康子を廊下に追い込み、襖を閉める。
二人の会話に耳をそばだてる早川。

由起夫　……帰ったよ。
康子　誰が？
由起夫　来たことは伝えてくれって言われた。
康子　……。
由起夫　……。
康子（襖を開け、早川に）コンビニじゃあ大きいダンボールなんてないよね？
早川　そこの電気屋とかの方が、あれなんじゃないですか。
康子　ああ。電気屋さんか。
由起夫　とにかくお前はここにいろ！
康子（少し笑って）なに怒ってんの？
由起夫　今日はもういいだろう？引越しの手伝いに来てるんだし。
康子　だからダンボール取りに行くのよ。
由起夫　そうだけど。

康子（にこやかに）じゃ、行ってきまーす。

康子は玄関へ。

由起夫はまた早川にすがって。

由起夫　怖いよ……。

康子は出て行こうとすると向こうから梨田が来た様子。

康子　あ、梨田さん。

梨田（声）こんにちは！

康子　大丈夫ですか？持ちましょうか？

梨田（声）いや重いですから。重いですから。

梨田は果物の入ったダンボール箱を手に入ってくる。

梨田　いや昨日まで××（果物の産地）に行ってたもんですから。

康子　そうですか。

梨田　これ××です。よかったら。

康子　すいません。こんなにたくさん。

梨田　本当は梨にしたかったんですけどね。なんせ名前が梨田ですから。ハッハッハ！

康子（困って）そうですか。（居間に）ちょっと。ちょっと。

由起夫と早川は廊下に出る。

康子　これ、ウチの人です。

由起夫　どうも。（会釈）

康子　で、こっちが美晴の。

早川　早川です。初めまして。

梨田　初めまして！梨田です！

康子　これ（果物）持っていってくんない？台所に。

由起夫　あ、うん。
梨田　ありがとうございます。
由起夫　あ、いえ。
梨田　ありがとう。
早川　あ、いえ。

由起夫と早川は果物を台所へ。
康子は二階に向かい、

康子　薫ー！梨田さーん！
梨田　お～い！薫～！

薫は降りてこず……。

康子　ごめんなさい。まだ準備できてなくて。
梨田　何か手伝いましょうか？
康子　大丈夫です。今、妹たちがやってますからとりあえず一服してください。
梨田　はい！一服します！
康子　ちょっと私、出かけますね。すぐ戻ってきますけど。
梨田　わかりました。いってらっしゃい！
康子　いってきます。

康子は出て行く。

梨田　お邪魔します！

梨田は靴を脱ぎ居間へ。なぜか高揚した様子で由起夫と早川に
握手を求める。

梨田　改めまして、よろしくお願いします。
早川　（握って）よろしくお願いします。
梨田　よろしくお願いします。

由起夫（握って）あ、お願いします。
梨田　どうしたんですか？お義兄さん！握りが弱いなぁ！
由起夫　そうですか？
梨田　アメリカ人の握手はね、こう（力を入れて）グッと握るんですよ。
由起夫（多少痛く）ああ。
早川　アメリカにいらしたんですか？
梨田　行ったことありません。
早川　え？
梨田　僕は日本が大好きですから。
早川　ああ、そうっすか。
梨田　オサミくんは？あるの？
早川　いや。ないっす。
梨田　じゃあ僕と同じで日本が好きなんだね。
早川　そういうわけじゃないんですけど。
梨田　お義兄さんはありますか？
由起夫　まあ一度。
梨田　どこへ行かれたんですか？
由起夫　グアムです。家族で。
梨田　グアム！いいとこですよねぇ！
由起夫（アメリカに）行ったことないんですよね？
梨田（聞いてない）いや薫もね、新婚旅行は海外にって言ってるんで一応候補に入れておきます！
由起夫　どうぞ。
梨田　座ります！

梨田は座る。由起夫と早川も、座って、

由起夫　早川くん、オサミっていうんだっけ？
早川　オサムです。
梨田　だめだなぁ、お義兄さん！弟の名前くらい覚えておかないと。
由起夫　ああ、すみません。
梨田　アメリカじゃあ裁判沙汰になりますよ。

由起夫　はい。気をつけます。
梨田　僕はね、国内にしたいんです。
由起夫　え？なにがですか？
梨田　新婚旅行！
由起夫　ああ、はいはい。
梨田　いやだなぁ！今その話してたじゃないですか！
由起夫　そうですよね。
梨田　面白いですね、お義兄さん！薫から聞いていた印象とずいぶん違う。
由起夫　そうですか？
梨田　こんなに面白い方だとは！
由起夫（早川に）俺、面白い？
早川　さあ。
梨田　面白いですよ！ハッハッハッハ！
由起夫　それで？国内の、どこ行かれるんですか？
梨田　四国です。
由起夫　四国？
梨田　その中をお遍路参りしたいなって。
由起夫　新婚旅行にですか？
梨田　あれ精神のいい修行になるんですよ。
由起夫　まあ、そうでしょうけど。
梨田　いや薫も言いましたよ。わざわざ新婚旅行で行かなくてもって。でもね、
　僕がすばらしいと思ったものは体験させてあげたいんです。特に薫には。
由起夫　へー。
梨田　どうですか？一度。
由起夫　僕は、遠慮しとします。
梨田　オサミくんは？
早川　オサムだよ。
梨田　オサミくん。君、日本人じゃないな？
早川　だからオサムだよ。
梨田　少し外国の血が入ってるんじゃないか？そんな顔をしている。

ここへ紳一郎と謙二郎が庭からやってくる。

紳一郎　こんにちは。
由起夫　はい？
紳一郎　あの、失礼ですが、手塚さんのご親戚の方でいらっしゃいますか？
由起夫　まあ、そうですけど……。
紳一郎　さっき、あの、（梨田を指し）こちらに入っていかれるところを、お見受けしたものですから。
梨田　私ですか？
紳一郎　はい。
謙二郎　別に、怪しいものではありません。
梨田　なんでしょう？
紳一郎　あの、少しお時間よろしいでしょうか？
梨田　ああ。まあ、いいですよ。

紳一郎と謙二郎は安堵の表情を浮かべる。

由起夫（立って）ここん家の子、呼んできましょうか？
紳一郎　いえ！それは！あの、こちらのお母様のことについて、ちょっと……。
由起夫　だったら、尚更……。
紳一郎　実はですね……え―……何から話していいものかあれなんですが……先ほどもですね、こちらにお伺いしたんですけれども、
謙二郎　あのですね、こちらのお母様が―
紳一郎　ちょっと待って、今は俺が。
謙二郎　今そんな話してもしょうがないだろ。
紳一郎　でも物には順序ってものが―
謙二郎　それで、さっきはお話を聞いてもらえ―
紳一郎（由起夫たちに向かい）いや聞いてたいただくためにはさ！（気づいて）あ、すいません！（謙二郎に）聞いていただくためにはですよ（由起夫たちに）聞いていただくためにはですよ―
謙二郎（由起夫らに）あのですね、単刀直入に申しまして、
紳一郎（由起夫らに）え―、一応、何度かお電話させていただいたんですが、
謙二郎　お母様がお葬式の予約をされていたんです。
梨田　？？

早川　？？
由起夫　……はい？
紳一郎　先ほどもお伺いしまして、
謙二郎　生前予約というんですが、
紳一郎　それで誤解されてしまったようなんですね。
謙二郎　打ち合わせはすべてやらせていただきまして、
紳一郎　あ、私たち、柿沼葬祭と申します。
謙二郎　しかしご家族の了承を得ていなかったものですから。
紳一郎　いわゆる葬儀屋でございます。
謙二郎　それで私たちが今お伺いしているわけです。
紳一郎　そういうわけなんです。

少し間。隣の犬が吠えた。

由起夫　よくわからなかったんですが。
早川　生前予約？
謙二郎　と申しますのはですね、お客様がお亡くなりになる前に、葬儀の段取りをすべて執り行うシステムでございます。
紳一郎　お母様がご家族の方には内密にとおっしゃっていたもので、段取りなどはお母様と私たちでやらせていただいたんですが、
由起夫　ちょ、ちょ、ちょっと待ってもらえます？
紳一郎　すみません。失礼いたしました。
由起夫（早川に）知ってた？
早川　知るわけないですよ、俺が。
紳一郎　おそらく、どなたもご存じないと思います……。
早川　ってことは、お義母さん、末期だってことは……。
紳一郎　ご存知でした。ご家族の方がご内密にしていらっしゃることも。
由起夫　……。
早川　……。
謙二郎　おそらくご家族の方に心配かけたくなかったんだと思います。知らないふりをしていたいとおっしゃっていたので。

梨田、泣く。

紳一郎　しかしながらですね、生前予約というのは、ご家族がいらっしゃらない場合など以外は、基本的にご家族の了承が必要でして。お母様があくまで喪主は、ご家族の方を希望されていたものですから。

梨田（泣きながら）お義母さん……。

紳一郎　葬儀代の方も全てお預かりしている段階でございます。あとは喪主となる方の了承だけとなるんですが……。

由起夫　喪主って、誰になるんでしょうか？

紳一郎　嫁がれていない次女の方か、もしくは長女の方でも結構です。

梨田（泣きながら）次女は、嫁ぎます。

紳一郎（聞き取れず）はい？

梨田（泣きながら）次女は、嫁ぎます。

紳一郎（まだ聞き取れず）まあ次女の方か、長女の方ですね。

謙二郎　まあ今は昔と違いますから、基本的にはどなた様でも。

由起夫　そうですか。

紳一郎　その、私どもの旨をですね、ご息女の方に伝えていただけないでしょうか？

謙二郎　何か誤解されているようなので。

ここへ薫が階段を降りてくる。それを追いかける奈央。

奈央　ちょっとどういうこと？！

薫　だから、お姉ちゃんに聞いてよ！

奈央　なんであの人が出てくるわけ？！

薫（泣いている梨田に）どうしたの？！まーちゃん！

奈央（葬儀屋に）また来たの？！

紳一郎　ではよろしくお願いします！

と紳一郎と謙二郎は逃げるようにして、去る。

更に階段から美晴がゆっくり降りてくる。

薫（由起夫に）どうしたの？！まーちゃん！
由起夫　いや、なんか―
美晴　奈央ちゃん、やめなよ。お姉ちゃん帰ったら話せばいいじゃん。
奈央　お見舞い行ったの？
薫　まだだと思う。
奈央　思うじゃ困る！
美晴　奈央ちゃん。
奈央　あの人とは絶対会わせたくないの！
薫　だから知らないんだって！あたしは！
美晴　あの人とか言わないでよ。そういうとこ、ひく。
奈央　美晴は黙ってて。
美晴「お父さん」でいいじゃん！
薫　まーちゃん！

熱くなった奈央は美晴に詰め寄ると、取っ組み合いの様相。
ここへダンボールを手に帰ってくる康子。
由起夫が奈央を、早川が美晴を、あわてて止めに入り、

由起夫（奈央に）やめなって！美晴ちゃん、妊娠してんだから！
早川（美晴に）美晴！落ち着けよ！
薫　まーちゃん！

康子は居間へ行くとただならぬ雰囲気に、

康子　どうしたの？
由起夫　あのさ―
奈央　なんであの人に連絡したの？
康子（事情がわかり）……薫。
薫　なによ！お姉ちゃんのせいでこうなったんでしょ！
康子　あんた話すからでしょ！
奈央　なに？あたしには黙っておくつもりだったわけ？
康子　……。

美晴　そうだよ。
由起夫　あのさ、今ケンカしてる場合じゃ―
美晴　お父さんに連絡するってなったら、奈央ちゃん反対するでしょ？どうせ。
奈央　当たり前じゃない！
康子　ほんと奈央に話すとめんどくさくなる。
奈央　めんどくさいってなによ？！
康子　いつだってそうでしょ？！
由起夫　ちょっと俺の話を―
康子　あんたはいっつも自分が正しいんだから！
薫（早川に）まーちゃんどうしたの？！なんで泣いてんの？！
早川　あ、いや―
康子　母さんのこと、父さんに報告して、何が―
奈央　あの人があたしたちに何したかわかってるの？！
皆　……。

電話が鳴る。
電話に出ようとしない姉妹に、由起夫が受話器を取って、

由起夫　はい手塚です……はい……え……（皆に）なんか、お義母さんが……。
奈央（慌てて受話器を奪い）もしもし……はい……はい……。

溶暗。

数時間後。
居間では早川と梨田が神妙な面持ちで座っている。
寝室からは美晴のすすり泣く声。
その様子を廊下から伺っている由起夫。
少しして、枕飾りを手にした紳一郎と謙二郎が玄関から居間へ。

梨田　……あのさ、
早川　はい。
梨田　お義父さんってどういう人だったの？僕、全然聞いてなかったから。
早川　俺もよく知らないんですよ。あいつもあんま覚えてないみたいだし。
梨田　そう……。
早川　まあ、女と出てったことくらいしか……。
梨田　そうか……それで薫は話したがらなかったのか……。
早川　……。
梨田　浮気とか、する？
早川　いや、どうっすかね。
梨田　絶対ダメだよね。それは人間として。
早川（由起夫を気にし）ああ。まあね。
梨田　ましてや父親という立場なら、尚更浮気なんてしちゃいけない。
由起夫　……。
梨田　オサミくんもこれから父親になるんだから、そんな最低の人間には絶対になっちゃいけないよ。
早川　まあ、ええ。
由起夫　俺ちょっと、二階の荷物、片付けてくる。
梨田　僕も行きますよ。薫の荷物ですから。
由起夫　いや。来ないでください。むしろ。
梨田　むしろ？
由起夫　梨田さんは早川くんの相手してあげてください。
梨田　わかりました。

由起夫は二階へと去る。

梨田　僕たちは良いお義兄さんを持った。こんなときでも僕らを気遣ってくれて。
早川　まあ、そうっすね。
梨田　お義兄さんは本当に、立派な人間だよ。
早川　……。

ここへ庭から現れる喪服姿の浅野。

浅野　あの、
梨田　はい？
浅野　手塚さん、いらっしゃいますか？
梨田　どちらさまですか？
浅野　手塚さん、いらっしゃいますか？
梨田　ですから、どちらさまですか？
浅野　手塚―
早川　同級生ですよ、美晴の。
梨田　ああ、同級生。
早川　（寝室に向かい）美晴。お客さん。
浅野　オサナジミですけど。
早川　は？
浅野　「オサナジミ」ですけど。

泣き腫らした表情の美晴が寝室から居間へ。

美晴　……。
浅野　この度は心より、お悔やみ申し上げ奉ります。
美晴　……わざわざありがとう。
浅野　あの、これ……。

香典袋を差し出す浅野。
それに触れた途端、美晴の目から涙が溢れる。

浅野　……。
早川　……。
梨田　わかるよ、美晴ちゃん。

梨田は美晴の肩を抱いて、

梨田　残された者の悲しみは、海よりも深く、アメリカよりも広いんだ。
美晴　触んないでよ。
梨田　あ、ごめん……。
美晴　今、お茶入れるから。
浅野　あ、うん。

美晴は襖を閉めて、台所へ。

梨田　美晴ちゃん、トイレに籠ってはよく泣いてたらしいね？薫から聞いたよ。
早川　ああ。みたいっすね。
梨田　例えば？どんなことで泣いてたの？美晴ちゃん。
早川　いや、昔のことはよく知らない―
浅野　（遮って）すごい覚えてるのは課外授業で動物園行ったときに、手塚さんがなんか、ウサギかなんかの絵を描いてて、それがなんか、すごい先生に褒められたんです。
梨田　へー。絵うまいんだ、美晴ちゃん。
浅野　それをなんか、男子の子に破かれて、ケンカになったんです。それで。
梨田　なるほどね。きっとその子は美晴ちゃんのことが好きだったんだよ。
浅野　あれ？鈴木さんだったかな……。
梨田　鈴木さん？
浅野　鈴木さんですね、ウサギの絵を書いてたのは。
梨田　美晴ちゃんは？
浅野　キリンだったっけな……いやシマウマだ、シマウマ。
梨田　ああ、シマウマね。
浅野　そうです。破られちゃったのはウサギですけど。
梨田　それでケンカになったんだ？

浅野　すごい引っかきあいっていうか。男子と鈴木さんが。
梨田　美晴ちゃんじゃなくて？
浅野　あ、手塚さんじゃないです。手塚さんはシマウマなんで。
梨田　じゃあ泣いたっていうのは？
浅野　泣いてないですね。誰も。
梨田　え？
浅野　っていうか見たことないですね、泣いてるのは。
梨田　ん？わかる？オサミくん。今の話。
早川　コイツの話、いつも意味不明ですから。
浅野　手塚さんは見せないんですよ。トイレに籠るのは誰にも見られたくないからなんですよ。誰にも頼らず、いつも独りで、辛さを乗り越えようと頑張ってるんですよ。

美晴が浅野のお茶を手に居間へ。

浅野　……。
梨田　美晴ちゃん。僕は美晴ちゃんの生き様に感動したよ。
美晴　は？
梨田　薫は美晴ちゃんほど強い人間じゃない。薫は僕が、必ず幸せにするからね。
美晴　すればいいんじゃないですか。

ここへ由起夫が二階から居間へやってくる。

由起夫（浅野に会釈し、梨田と早川に）あれ、まとまってる荷物だけでも運んじゃいませんか？上、ごった返してるんで。
梨田　わかりました。

由起夫たちとすれ違いざまにやってくる紳一郎。

紳一郎　すみません。そちらのお部屋（寝室）の電源って……？
美晴　あ、はい。

美晴と紳一郎は寝室へ。
浅野は二階に上がろうとする早川に、

浅野　……あの。
早川　はい？
浅野　手塚さんをトイレから出してあげるのはあなたじゃない。僕だから。
早川　あ？なに言ってんの？

ここへ美晴が戻ってくる。

浅野　（早川を睨み）……。
早川　（無視して）……。

早川も二階へ。
すると浅野は、こっそりと襖を閉めようとする。

浅野　あれ、手塚さんだよね？課外授業でシマウマの絵、描いたの。
美晴　奈央ちゃんだよ、それ。
浅野　え？そうだっけ？でも、金賞取ったよね？
美晴　奈央ちゃんがね。
浅野　ああ、そう……。
美晴　皆がウサギとかキリン描いてんのにさ、ひとりでシマウマ描いて満足してんの。

そして、襖が閉められた。

浅野　あ、あのさ……。
美晴　なに？
浅野　つ、辛いよね？辛いでしょ？ぜ、絶対辛いよ、手塚さん。
美晴　……
浅野　（手を広げ）うん。いいよ。おいで。
美晴　は？

浅野　これからは、僕に頼ってくれればいいからね。
美晴　……。
浅野　僕の人生をかけて、手塚さんを幸せにするから。
美晴　え、なに？傷心してる女は口説きやすいとか、マンガに描いてあった？
浅野　別に、そういうんじゃないけど……。
美晴　（胸ぐらを掴んで）ホント重いんだよね。ずっとキモいんだよね、マジで、昔っから。
浅野　えっ？
美晴　この際だからはっきり言うけどさ、あんたのそういうとここっちは利用してるだけだから！ただでマンガが手に入ると思って、ずっとたぶらかしてただけだから！
浅野　えっ……。
美晴　っていうか、あんたに抱かれるくらいなら、あたし、死ぬから！
浅野　えぇ……。
美晴　っていうか、自分が利用されてることくらいそろそろ気づけよ！バカ！

階段からダンボール箱を手に由起夫、梨田、早川が降りてくる。
浅野は廊下へ出ると早川に、

浅野　あの、旦那さん。
由起夫・梨田・早川　はい？
浅野　手塚さん、子供堕ろしてますよ。
美晴　！
早川　！
浅野　子供、堕ろしてるよ！

浅野は勝手口を走り去る。
早川は居間にいる美晴の元へ行き、

早川　マジ？お前？
美晴　……。
早川　なあ？！

由起夫（なだめて）何があったかわからないけどさ、今日は。
早川　……。

庭に残された浅野の靴。それを梨田が拾って、

梨田　靴！彼の！
美晴　貸してください。
梨田　ＯＫ！

美晴は靴を受け取ると、浅野を追いかけ勝手口を去る。
そこへにこやかに現れる紳一郎。

紳一郎　あのー、お取り込み中のところすみません。喪主様は？
由起夫　多分まだ、ご近所に。

慌てて謙二郎が現れる。

紳一郎　戻られましたら、打ち合わせをさせていただきたいんですが、こちらの部屋、使わせていただいても？
由起夫　どうぞ。
紳一郎　ありがとうございます。

早川は美晴を追いかけ玄関から去る。
「オサミくん！」などと言いながら追いかける梨田。
取り残された段ボールを手に、由起夫も玄関から外へ。

謙二郎　おいおいおいおい。
紳一郎　すげえな。
謙二郎　ちげーよ。兄貴だよ。なんちゅうタイミングで打ち合わせ切り出してんだよ。
紳一郎　バカ。あそこで入んなかったらもっともめてたぞ。
謙二郎　いいんだよ、他人なんだから。空気を読めよ。

紳一郎　空気読んでの行動だよ。
謙二郎　そっち、上座。
紳一郎　ああ、そうか。（と下座へ）
謙二郎　大丈夫かよ。
紳一郎　大丈夫だよ。

紳一郎はバックから、棺桶や祭壇のカタログを座卓に置く。
配置が決められているらしく丁寧に。

紳一郎（確認し）よし。
謙二郎「よし」じゃねえよ。スケジュール、火葬場の。
紳一郎　わかってるよ。
謙二郎　うそつけ。
紳一郎（と携帯で電話を）あ、もしもし、柿沼葬祭です。明後日以降の（手帳にメモしつつ）はい……はい……。
謙二郎　＊２２まで聞けよ、２２……２２日までだぞ。
紳一郎　＊はい……ありがとうございます。またよろしくお願いしますね。どうも。（切る）うるさいんだよ。やんや、やんや。

電話の最中、由起夫たちは二階へ。
紳一郎は火葬場の日程をメモ。

謙二郎　やっぱ前の仕事戻れよ。向いてねえよ。
紳一郎　グダグダ言うな。俺だって一生懸命やってんだ。
謙二郎　さっきからニコニコしやがって。
紳一郎　あ？
謙二郎　保険の営業とは違うんだよ。神妙な顔しろよ、神妙な。
紳一郎　してるだろ。
謙二郎　ニヤニヤだかヘラヘラだか知らねえけど、クセついてんじゃねえの？
紳一郎　……。
謙二郎　塩撒かれたのなんて初めてだよ。
紳一郎　……。

謙二郎　いいよ。もう打ち合わせは俺がやっから。黙って聞いてろ。
紳一郎　……。
謙二郎　兄貴に任すといっつもこうだよ。
紳一郎　……。
謙二郎　言っとくけどな、今日でもうはっきり決めたぞ。柿沼葬祭は俺が継ぐ。
紳一郎　ヘラヘラとはなんだ！
謙二郎　……そこかよ。遅えんだよ！怒るのが！

ここへ康子、薫、奈央が玄関から入ってくる。
奈央は火葬許可証を紳一郎へ。

奈央　あの、これ、火葬場の。
紳一郎（受け取って）ありがとうございます。
謙二郎　もうお線香あげられますんで。
康子　すみません。じゃあ。

康子と薫は寝室へ。

奈央　あの、これ（封筒）クリーニング代に。
紳一郎　いえ。それは。
奈央　でも私のせいですし―
謙二郎（封筒を受け取り）すみません。気を使っていただきまして。
奈央　あ、いえ。こちらこそ、すみませんでした。
紳一郎　いえ。誤解させてしまった我々にも責任がありますから。
奈央　今、お茶、出しますね。
紳一郎　あ、お構いなく。ほんとに。

奈央は襖を閉め、お茶の準備を始める。
鈴の鳴る音。

謙二郎　台所に××（果物）あったぞ。出てきたらどうすんだよ。

紳一郎　食べるしかないだろ。そうなったら。
謙二郎　大丈夫かよ。
紳一郎　大丈夫だよ。

ここへ康子が入ってくる。

康子（開いてあるカタログを見て）これ、母が選んだっていう……。
謙二郎　はい。こちらの祭壇と、この藤色の棺ですね。
康子（目頭を押さえ）……。
謙二郎　この度は、お母様の御訃報に接し、衷心よりお悔やみ申し上げます。

互いに頭を下げる。

謙二郎　お悲しみのところ、大変恐縮ではございますが、ご葬儀の打ち合わせをさせていただいてよろしいでしょうか？
康子　はい。
謙二郎　一応、お母様と打ち合わせさせていただいておりますので、お伺いしたいのは一点だけなんですが、
康子　はい。

鈴の鳴る音。

謙二郎　葬儀の日程のほうですね。お通夜はいつになさいますか？
康子　そうですね。病院生活が長かったものですから2、3日は家にいさせてあげたいんですけど。
謙二郎　では21日通夜、22日告別式ということで、よろしいですか？
康子（カレンダーを見て）そうですね。それでお願いします。
謙二郎（紳一郎に）22、どうなってた？
紳一郎　あ、いや、まだ。
謙二郎（怒り）……。
紳一郎　今、確認してまいります。

紳一郎は寝室の方へ去る。

謙二郎　すみません。
康子　あ、いえ。
謙二郎　では先に、こちらが当日の斎場になるんですが、お通夜をですね、７時から始めさせていただきますので当日、ご家族の方は１時間ほど前にいらしてください。
康子　はい。
謙二郎　家族葬ということで、参列されるご親戚の方は３０分前で結構です。

ここへ玄関に残った荷物を取りに戻る由起夫と梨田。
同時に薫も寝室から出てきて、

康子　あの、母の友人に亡くなったことだけは伝えておきたいんですが。
謙二郎　＊それは構いません。ただ出席は丁重にお断りしていただいて、
康子　はい。それは。
謙二郎　失礼のないように、後日お送りするお手紙も用意させていただきますので、後ほどそちらの枚数も。
康子　わかりました。

薫　＊何してんの？こんなときに。
梨田　いや、とりあえずまとまってるのだけでも、と思って。
薫　やめて。
梨田　どうして？
薫　あたし、引っ越さない。
梨田　そりゃ今日は―
薫　ずっと！
梨田　？！
薫　ずっと引っ越さない！
梨田　それは……結婚をやめるってことか？

薫は答えず居間へ。

薫（謙二郎に）すみません。
謙二郎　いえ……ではこちらの地図は差し上げますので、ご親戚の方に場所と時間だけ。
康子　＊＊わかりました。
奈央　＊＊すみません。わがままで。
梨田　奈央ちゃんが謝ることないよ。（由起夫に）とりあえず、これ上に。
由起夫　あ、はい……。

由起夫と梨田は荷物を二階へ。
そこへ紳一郎が戻ってきて、

紳一郎　あ、大丈夫でした。２２日。
謙二郎　それでは、２１日お通夜２２日告別式ということで。
康子　そういえば、あの、仏壇っていうのは？
謙二郎　まあ、今はお急ぎにならなくても。
康子　そうですか。
謙二郎　安いものではありませんので、私どもで紹介できるカタログをおいていきましょうか？
康子　はい。お願いします。
謙二郎（紳一郎を伺う）
紳一郎（「ない」とアピール）
健二郎（「いいから」とばかりに席を譲る）
紳一郎（仕方なく鞄からカタログを出し）こちらになります。（開く）
康子　ありがとうございます。
紳一郎　こちらがですね、２０××年のグットデザイン賞を受賞したものになります。で、こちらが２０××年のグットデザイン賞でございます。で、こちらが―
康子　あの普通のってないんですか？
謙二郎（小声で）ふざけてんのかよ。
紳一郎　すみません。そこまで話が及ぶと思わなかったものですから……。
康子　あ、いいんですよ。別に後でも。

ここへインターホンが鳴る。
奈央が手を止め、玄関へ。

康子　あの、お花は、どうしたらいいんでしょう？
謙二郎　＊＊＊それはこちらのフォームに、お名前をご記入いただきまして、
明日中にでも私どもにメールしていただければ。
康子　あ、わかりました。
謙二郎　他に何か、ご不明な点はございますか？
康子　いや何分、私たち初めてなものですから、わからないことだらけで。
奈央　＊＊＊はい？
所　あの、康子さん、いらっしゃいますか？
奈央　ちょっと待っていただけますか？

奈央が居間へ来て、

奈央　お姉ちゃん。なんか、お客さん。
康子（紳一郎と謙二郎に）ちょっと、すいません。

康子は廊下へ出、所と目が合う。

康子　……。
所　……。
康子　どうぞ。おあがりください。
所　はい。お邪魔します。

所は玄関を上がり、居間へ。

康子（奈央に）友達。
奈央　そう……。
康子　今打ち合わせしてるんで、すみませんけど、その辺、適当に。
所　はい。（薫に）こんにちは。

薫　すみません。わざわざ。
所　いえいえ。

奈央がお盆にお茶と果物を乗せ、紳一郎と謙二郎の前へ。

奈央　どうぞ。
紳一郎　すみません。
謙二郎　どうぞ、お気遣いなく。
奈央　これ××（果物）です。良かったら。
紳一郎　あ……はい……。
奈央（所に）今、お持ちしますね。
所　すいません。

奈央は台所へ。

康子　どうぞ。
紳一郎　じゃあ、いただきます。
謙二郎　いただきます。

謙二郎は紳一郎に果物を勧める。
仕方なくそれを頬張る紳一郎。
謙二郎は果物には手をつけず、お茶を一口。

謙二郎　これで最後になるんですが、
康子　はい。
謙二郎　戒名をつけるに当たってですね、お母様の生前のお人柄を教えていただけると。
康子　ああ。（と薫を見る）
薫　どういうんだろうね？
康子　まあ幼い頃に両親が離婚してるもんですから、今までずっと女手ひとつで育ててくれたんですね、私たちを。
謙二郎（メモリつつ）はい。

康子　たくましいというか、強い母でしたね。もちろん優しいところもありましたけど。
謙二郎　なるほど。
薫　あとは私たちのことを考えて、何でも先に決めちゃうところもありましたね。このお葬式のこともそうですけど、（康子に）ねえ？お祭りあったら、先に浴衣買ってきちゃったりとかしてね。
康子　ああ。柄のことでもめたもんね。
薫　そうそう。
謙二郎（メモリつつ）ああ。が、ら。
康子　私たちに、不自由な想いをさせまいとしてくれて。

奈央がお茶と柿をお盆に乗せ、所に。

奈央　どうぞ。
所　すみません。
薫　ごめん。ダメだ。あたし。

薫は涙ぐみながら玄関を出て行く。

謙二郎　わかりました。ありがとうございます。
康子　こちらこそ、よろしくお願いします。
謙二郎（メモ帳などを片付けて）それでは、また何かありましたらいつでもご連絡ください。夜中でも構いませんので。
康子　はい。助かります。
奈央　よろしければ（果物を）食べてってください。
紳一郎　あ……はい。

また紳一郎に柿を勧める謙二郎。
紳一郎は嫌々ながらもすべて完食する。

奈央（謙二郎に）あの、遠慮なさらずに。
謙二郎　すみません。私、柿が苦手なものですから。

紳一郎　え……？？
奈央　そうでしたか。それは失礼しました。
謙二郎　こちらこそ、申し訳ございません。

と、今度は自分の柿を紳一郎に勧める。
紳一郎は必死に拒否する。

謙二郎　ごちそうさまでした。では失礼します。
康子　ありがとうございました。

紳一郎は廊下へ出た途端、嘔吐する。

謙二郎　おい！
康子　トイレ、そっちです！

紳一郎はトイレに駆け込む。

謙二郎　すみません！今すぐ片付けますから！お触りにならないでください！

謙二郎は慌てて外へ。
女たち、皆、もらいゲロし……。
謙二郎はバケツと何枚かの雑巾を手に戻ってくと汚物をまたぎ
ジャンプ。しかし転んでしまい、

謙二郎（痛がりつつ）あの、匂っちゃうんで。閉めますね。

襖を閉める謙二郎。汚物を片づけ始める。

奈央　あの、いいですからね。××残していただいて。
所　はい……。
康子　ちょっと一件、電話させていただきます。
所　どうぞ。

康子は家の電話を取り、ダイヤルをプッシュ。

謙二郎　あの。表の水道使わせていただいても？

奈央　どうぞ。

康子　……もしもしユウキ？今からこっちこられる？……おばあちゃんがね、死んじゃったの……うん。パパに迎えに行かせるから……ほんと？一人で大丈夫？……そっか。もうお兄ちゃんだもんね。

電話から「ママ。元気出してね」の声が漏れ聞こえてくる。

康子　ありがと。じゃ待ってるから。はーい。（受話器を置く）

電話の間、奈央は葬儀屋たちのお茶を片付け、居間へ。

康子　あの人、呼んできてくれる？

奈央　……わかった。

奈央は二階へ。

康子　初めまして。

所　でも、初めてって感じがしませんね。

康子　ね。ほんと。

謙二郎は雑巾をバケツに入れ、玄関から外へ。

所　なんか、すごいときに呼ばれちゃって。

康子　ごめんなさいね。

所　この度は、ご愁傷様です。（頭を下げる）

康子（頭を下げる）

由起夫が階段から降りて襖を開ける。瞬時にして状況を把握し、すぐさま襖を閉める。

由起夫　おえー。
康子　＊（思わず立ち上がり）大丈夫？
所　＊（同じく）……。
由起夫　なんか、気持ち悪くなってきた。
康子　気のせいよ。
所　とりあえず、こっちおいで。

由起夫は仕方なく、居間へ。
沈黙。

康子　また来てもらったの。
由起夫　そう……。
所　あの、私、なんで呼ばれたんですか？
康子　ほんとは生きてるうちに会っていただきたかったんだけど、
由起夫　えっ？
康子　母の顔、見ていただけませんか？
所（意味がわからず）私がですか？
康子　はい。
所（もう一度）私がですか？
康子　はい。
所　……わかりました。

康子は所を寝室へ案内。戻ってきた康子に、

由起夫　携帯見た？
康子　うん。見た……ごめん。
由起夫　……。

所、戻ってきて、

所　拝見しました。
康子　お線香、あげていってください。

所　私がですか？
康子　お願いします。
所　……それは止めときます。（と元の位置へ）
康子　あれでまだ５８なんですよ。ふけてると思いません？
所　なんとも言えないけど。
康子　昔はね、歳よりもずっと若く見えて、近所でも評判だったんです。
所　そうですか。
康子　あれ苦労の証だと思ってるんです、私。父に出て行かれて。
所　……。
康子　母のこと、尊敬してますけど、ああいう風にはなりたくないなって。
所　……。
康子　だから「別れて」とは言いません。子供から離すのだけは、勘弁してください。

頭を下げる康子。
所は思わず笑い出し、

由起夫　何が可笑しいんだよ？
所　大丈夫ですよ。私にも彼氏がいますから。
由起夫　ええ？
所　騙してたのはお互い様でしょ？
由起夫　……。
所「ママ、元気出してね」ってさっき、息子さん。
康子　ああ、ええ。
所　いいお子さんですね。
康子　ありがとう。（と思わず涙が）
所　私も子ども欲しくなっちゃった。

ここへ勝手口から美晴が帰り、居間へ。

美晴（所に会釈し）
所（会釈を返して）こんにちは。

美晴　どうも。（康子に）なんか、臭くない？
康子（顔を隠して）……。
由起夫（それがわかり）臭いよね、確かに。

謙二郎がファブリーズを持って現れ、大量に撒く。

所　なんか、目に来る匂いですよね？
康子　……。
所　ね？奥さん。
康子（泣き笑い）ほんと、目に来る。

康子と所は笑いあう。
水洗の流れる音。

謙二郎　あのさ、もうこの現場で最後にしてくれよ。

襖が開くと紳一郎が土下座していて、

紳一郎　本当に申し訳ございません！
謙二郎　一応、ファブリーズ撒いてみたんですけど。
康子　もう結構ですよ。後は何とかしますから。
紳一郎　申し訳ございません……。
康子　そんな、頭上げてください。
梨田（声）薫！薫～！

梨田はドタドタと階段を下り、駆け足で玄関を去る。
それを追って、階段から降りてくる奈央。

康子　どうしたの？
奈央　なんか、薫ちゃん探してくるって……。

いつの間にか、所が由起夫に何やら耳打ちをしていた……。

由起夫　？！
所　それじゃああたし、帰るね。（皆に）お邪魔しました。
康子　……。

所は玄関で見送る康子と由起夫に、

所　お会いできて良かったです。ありがとうございました。
康子　こちらこそ。ご足労いただいて、ありがとうございました。
所　バイバーイ。
由起夫　……。

所、玄関から去る。
少し間。

謙二郎　では私たちもそろそろ……。
紳一郎　本当に申し訳ありませんでした。
康子　ほんとにもう、気になさらないでください。
謙二郎　ではまた後日、伺いますので。何かあればご連絡を。
康子　よろしくお願いします。
謙二郎　それでは失礼いたします。
紳一郎　本当に申し訳ありませんでした。

紳一郎と謙二郎も玄関から去って行く。

由起夫　……お線香、あげさせてもらおうかな。
康子（答えず）……。

由起夫は静かに寝室へ。
康子は一人、見送らずにいた美晴に、

康子　美晴も。お線香あげてきて。
美晴　うん……。

美晴も寝室へ。
所が残していった果物……。

康子（じっと見て）……。

果物を怒り任せに頬張る康子。それから湯のみと皿を片付けに台所へ行くと、それらをシンクに乱暴に放る。

康子　……。
奈央　……。

そして康子は平然と座卓を拭きはじめた……。

奈央　……大丈夫？
康子　うん。まあ、一応ね。
奈央　そう。

ここへ薫が玄関から帰ってきて居間へ。
鈴の鳴る音。

康子　落ち着いた？
薫　うん。平気平気。
奈央　梨田さん、探しに行っちゃったよ。
薫　知ってる。
奈央　会ったの？
薫　ううん。ぽんちゃん家んとこの交差点でさ、あたしの名前叫びながら、目の前走ってったから。
康子　追いかけてって追い越しちゃったんだ？
奈央　なんか梨田さんらしいね。
薫　ったく、まっすぐしか見ないんだから。
康子　でもそこがいいとこなんでしょ？
薫　……。

康子　大丈夫よ。あんたが横見てあげればいいんだから。
薫　……。

ここへ美晴が居間へ戻ってくる。
姉妹、四人に……。

奈央　……あのさ、さっきの話、ちゃんと聞かせて。冷静に聞くから。
康子　……どこから話せばいいの？
奈央　連絡先は？どうやってわかったの？
康子　昔の電話帳見つけたのよ。薫が引越のあれしてるときに。それで父さんの会社の番号がわかったの。
奈央　まずお姉ちゃんに連絡したんだ？一緒に住んでるあたしに言わないで。
薫　うん……。
奈央　それで？
康子　あたしが会社に連絡した。そしたらまだ働いてた。
奈央　……。
薫　今、どうしてるって？
康子　都内に住んでる。家族がいる。ハタチと１９の息子がいて、長男はもう独り立ちして一緒には住んでない。次男は大学通って―
奈央　やめて。聞きたくない。
康子　……。

鈴の鳴る音。

美晴　私は会いたいよ。つーか会ってみたい。お父さんが、どんな状況でも。
薫　あたしも、そうかも……。
奈央　信じらんない。母さんの目の前で。
薫　……。
美晴　……。
康子　そりゃあ、あたし達にだって多少の恨みはあるけどさ、
奈央　じゃあ、なんで電話したの？
康子　母さんの状況報告。

奈央　そんなのする必要なくない？
康子　どうして？
奈央　私たち捨てて出てった人だよ？！
美晴　冷静に話すんでしょ？おっきい声出さないでよ。
奈央　……。

ここへ由起夫が居間へ。

奈央　自分も会いたいだけでしょ？素直にそう言えばいいじゃん。
康子　私聞いてみたの、何で出て行ったのか。普通の親なら新しい人が出来たからって、そんな簡単に出て行くとは思えなかったから。
由起夫　……。
康子　でも何にも言わなかった。謝るばっかりで。
奈央　男なんてそんなもんじゃない。
康子　……。
由起夫　あのさ……前に、お前と薫ちゃんと三人でお見舞い行ったじゃない？
康子　うん。
由起夫　あの時、二人が先生のところに行って、俺、病室でお義母さんと二人きりになったんだけどさ……お義母さんに、謝られたんだよ。「パパ、ごめんね」って。俺、お義母さんにパパなんて呼ばれたことないしさ、薬飲んだ後だったから誰かと勘違いしてるんだと思ってたんだけど、どうも、その、お義父さんに間違われてたみたいなんだよ。
薫　なにを、謝ってたの？
由起夫　お義母さん……自分が浮気したことを謝ってた。
康子　……。
薫　……。
奈央　……。
美晴　……。
由起夫　ずっと俺に「パパ行かないで」って……それ聞いてから、なんかちょっとお義母さんとこ行き辛くなっちゃって……。

長い沈黙。

由起夫　事実かどうかはわかんないけどさ、もう昔のことはいいんじゃないかな。みんなのお父さんとお母さんには変わりないんだから。
奈央　……あんたに言われたくない。
由起夫　……。
奈央　よくそんなことが言えますね？そんな嘘ついてどうすんですか？自分が浮気してるの棚に上げて！

康子は奈央をビンタする。
奈央はビンタをやり返す。

康子　そんなもんじゃないの。あんたが考えてることみたいな、そんな簡単なことじゃないのよ。

康子は二階へ上がっていく。
由起夫はそれを追いかけて……。

美晴　……子供の頃さ、なんか母さん、奈央ちゃんのことばっか贔屓してるように見えなかった？
薫　そう？
美晴　あたしは、そんな感じがしてたんだけど。
薫　ふーん。
美晴　それってさ、奈央ちゃんがお父さんにベッタリだったから、母さんそれに―
奈央　贔屓なんかされてないよ。あんたの方でしょ？贔屓されてたの。
美晴　んなわけないじゃん。
薫　ま、いいじゃん。どっちだって。
美晴　まあね。そうなんだけど。
薫　ほんと。どっちでもいいよ、事実なんて。
奈央　……。

玄関が開く。早川が戻ってきた。
奈央は話をそらすように寝室へと去る。

ここへ電話が鳴る。美晴が出て、

美晴　もしもし……はい……え、ほんとですか？……いますよ。代わります？
（受話器を押えて薫に）梨田さん。
薫（動かず）……。
美晴　なんか、道に迷ってるんだって。
薫（仕方なく出て）もしもし……うん……うん……うん……うん……。

そのうち「好きだ！愛してる！」を連呼する梨田の声が漏れてくる。

早川　俺が恥ずかしくなってきた。
薫　ありがと。まーちゃん。今どこにいるの？……何が見える？……じゃ、今迎えに行くから待ってて。（切って）ちょっと、迎えに行ってくる。

薫は玄関を出る。
鈴の鳴る音。
早川が庭に出て、タバコに火を付けようとすると、

美晴　堕ろしてないよ。
早川　……。
美晴　あいつにお金借りるのに適当言っただけ。
早川　……何の金？
美晴　……車。
早川　は？
美晴　……。
早川　お前、あれ、姉ちゃんに借りたって。
美晴　貸すわけないじゃん。お姉ちゃんたちが。
早川　……。
美晴　車買ったらパチンコやめるって言ったじゃん？でもやめてねーし。
早川　……いくら？
美晴　……。

早川　いくら借りたんだよ。
美晴　１００万。
早川　はあ？！お前、マジ言ってんの？！
美晴　うん……。
早川　あいつ、金持ってんだな。
美晴　あいつの楽しみ、貯金しかないからね。
早川　……。

早川は火を付けるのをやめ、買い足してきたタバコを全て、ゴミ箱に捨てる。その数、１０箱。

美晴　てめえ、何箱買ってんだよ！
早川　うるせえ！どこなんだよ？あいつん家。（タバコをしまう）
美晴　行ってどうすんの？
早川　礼、言うよ。
美晴　いいよ、別に。
早川　よかねーよ。案内しろよ。

美晴は渋々立ち上がって早川と玄関へ。

早川　（靴を履きながら）そういえばどうした？あいつの靴。
美晴　捨てた。なんかムカついたから。
早川　マジで？じゃあそれ探しに行くか。
美晴　もう無理だよ。川に投げ捨てたから。
早川　え、ガチで？！

と二人は外へ。
しばらくして寝室から出てきて、二階へ上がろうとする。
すると、

母（声）奈央。

金賞を取ったシマウマの絵を手に、出てくる母。

母（絵を掲げ）金賞取ったんだってね？

奈央　……。

母　偉い！ママ自慢しちゃおうかな、これ。

母は絵を見ながら嬉しそうに居間へ。
思わず追いかける奈央。

母「ゼブラ」っていうタイトルがいいよね。

奈央　……。

母　きっとみんなはウサギとかキリン描いてるんでしょ？でもそこでシマウマを選ぶあんたのセンスがいいわ。抜群！

奈央　……。

母　あ。でもこんなこと言ったら美晴に怒られちゃうね？あの子、ウサギの絵描いてたから。

奈央　……。

母　フフフ……美晴には内緒ね、今の。

奈央　……。

母　シマウマってね、すっごい崇高な動物なんだよ。

奈央　……。

母　崇高って言うのは、なんていうか、こう位が高いの。他の動物より。何でか知ってる？

奈央　……。

母　あのね、お葬式あるでしょ？あれ、みんな白黒じゃない？っていうのは、亡くなった人が天国に行く時にね、みんなシマウマに乗っていくからなの。だからね、神様の使いなの。

奈央　……。

母（絵を眺めて）ほんと嬉しいなー！ママ！

奈央　……。

母　よし！じゃ今日は奈央の好きなシチューにしよっか？ね？

奈央　……。

母（奈央の頭をなで）でかした。

と母は台所へ。

母　今までで、一番おいしいの作ってあげるから。

奈央は絵を取り、それを眺める。
台所に立つ母の姿。
奈央はそれをじっと見つめて……。
溶暗。

数日後の告別式終わり。
座卓にはひとつの皿に盛られた大量の果物が。
薫が電話をしている。
康子と美晴はそれをニヤニヤしながら見ている。
女たちは皆、喪服姿で……。

薫　ううん。イチね、イチ。シチじゃなくて……ううん、イチ……イチ。シチじゃなくて。1、2、3、4、のイチね……そうそう2691。それが私の番号だから。

康子は立ち上がり、寝室へ向かって。

康子　ねえ。ほんとにいいの？
薫　で、父さんのは？
奈央（声）いい。
薫　あ、そうか。じゃ後でお姉ちゃんに聞いとくね。（と康子を見る）
康子（首を振って）
薫（少し小声になって）あのさ、今、奈央が買い物行っちゃってるからさ、後でまた電話してあげてくんない？……大丈夫よ。それはあたしたちが保証するから。じゃなかったらあたし達だって電話してないもん……それじゃお願いね……うん、はーい、また。（受話器を置く）全然変わってないね、声。
康子　でしょう？
美晴　あたし、初めて聞く感じだったなぁ。
康子　ま、あんたちっちゃかったもんね。

ここへ梨田が薫の洋服を持って、玄関から外へ。

薫　あとで父さんの携帯、教えてよ。
康子　うん。

私服姿の奈央が寝室からやってきて、

康子　あんたにも、父さんの連絡先教えとこうか？
奈央　いい。とりあえず、四十九日終わるまでは。
康子　そう……。
奈央　大丈夫だよ。ちゃんと話すし、会う気だって別にないわけじゃないんだから。
康子　じゃ、聞く気になったら連絡頂戴。
奈央　わかった。（美晴に）ねえ。その××食べちゃってよ。一人じゃ食べきれないから。
美晴　え、もう無理だよ。
奈央　薫ちゃん。
薫　ちょっとやめてくれない？あたしにだって満腹の時ぐらいあんだよ。
奈央　薫ちゃんがこんな剥くからでしょ？
薫　だってみんなもっと食べると思ったんだもん。
奈央　なんでよ。さっきお昼、食べたばっかなのに。
薫　だってあたしその後すぐ出しちゃったんだもん。
康子　もう便秘治ってるね。
薫　絶好調。
美晴　そういえばさ、うんちが細い人って、痔になりやすいってほんと？
康子　うそ。そんなの聞いたことないよ。
薫　普通逆なんじゃないの？
康子　そうだよねぇ。
奈央　それあれだよ、便が細い人は痔の可能性があるってことだよ。
薫　イボがあるとか？
奈央　そうそう。
薫　でもさ、でもさ、自分がどのくらい太いかなんてわかんなくない？人の、見たことないから。
康子（美晴に）あんた、どんくらい？
美晴　なんでそんなの発表しなきゃいけないの？
康子　いいじゃん、別に。女だけなんだし。
薫（美晴に）え、どんくらい？
康子　どんくらい？

と二人は美晴にしつこく「どんくらい？」と聞く。

美晴　もうしつこい！
康子　あんたが言わないからでしょうよ。
美晴　指３本ぶんとかって言わないっけ？
康子　それ男の人のアノ太さじゃない。
美晴　ああ。そっか。
薫　へー。（と自分の指三本を掴んでいる）
奈央（薫の手を叩き）確認しないの。
薫　もう。叩かないでよ。
康子　本人の指よ。本人の。
美晴　薫ちゃんの指じゃ、梨田さんかわいそうじゃん。
薫　お前、いつか殺す。
美晴（少し笑って）なんでよ。
康子（自分の指三本を掴み）あー、でもこんなもんかも。
美晴　由起夫さん？
奈央　ちょっと！やめてよ！
美晴　冗談だよ。ほんと奈央ちゃん頭固いんだから（笑）。
康子　ちょっとやってみなさいよ。奈央。
奈央（自分の指三本を掴む）
康子　美晴も。
美晴（自分の指三本を掴む）
康子（薫に）あんた２本ね。
薫　……はい。
薫・奈央・美晴（確認し）あー。
康子　ね？だからこれより細いと痔になりやすいんじゃない？
奈央　２本じゃ細いもんね、確かに。
美晴　薫ちゃん、１本だよ。
薫　お前、いつか圧殺する。
美晴（無視して）え、じゃあ長さは？
康子　それは日によるじゃん。
美晴　まあ、そうだけど。

康子　あたしさ、1回すっごい長いの出たことあんのね。
薫　え、どんくらい？
康子　もう便器からはみ出そうなくらい。
美晴（笑って）うそ。
薫　マジで？
康子　あたしすっごく嬉しくなっちゃって、思わずあの人に見せちゃったもん。

姉妹は大爆笑で。

奈央　ちょっと、やめてよ。
康子（美晴に）え、見せたことない？
美晴　ないよ。あるわけないじゃん。
康子（薫に）ない？
薫　ないよ。ないない。
康子（奈央に）あんたは、いいや。
奈央　なんでよ。聞いてよ。
康子　あんた見せる人いないじゃん。
奈央　でも見せたことなんてありません。
康子　そうなの？やだ。なんかあたしだけ恥ずかしいじゃん。

ここへ私服姿の由起夫、梨田、早川が現れて、

由起夫　着替えるんじゃなかったの？
康子　ごめんごめん。今着替えるから。
薫　もういいんじゃない？このまま帰っちゃえば。
康子　そうね。どこも寄ってくとこないし。
美晴　よし、じゃ行くか。
梨田　残りの荷物はまた、近いうちに。
奈央　はい。わかりました。

と夫婦それぞれに会話しながら玄関から外へ。
奈央だけが話す相手がいない……。

そして、誰もいなくなる部屋。
照明、ゆっくりと変化。
夕方。
少しして奈央が二階から降りてくると居間へ。
しかし何もすることがなく、目の前の果物を一口……。

奈央　……。

しばらくして部屋のインターホンが鳴る。

紳一郎（声）すいませーん……すいませーん。
奈央（玄関を開けて）はい？
紳一郎　先ほどはお疲れ様でした。
奈央　こちらこそ、お世話になりました。
紳一郎　あのですね、（鞄からカタログを出しながら）先日、お渡しするのを忘れてしまいまして。これあの、仏壇のカタログです。
奈央　ああ、はい。
紳一郎　別に、この中からお選びにならなくても結構ですんで。今はこれよりも安いタイプの物は一杯ありますから。
奈央　ありがとうございます、わざわざ。
紳一郎　もしこの中からお選びいただきましたら、私どもに、ご連絡をいただければ、
奈央　わかりました。
紳一郎　といっても、対応するのは私ではなく、弟だと思うんですが……。
奈央　そうなんですか？
紳一郎　私事で恐縮なんですが、私、葬儀屋を辞めることにしまして。
奈央　えっ……。
紳一郎　もとは普通のサラリーマンをやっていたんです。それで父が他界したのを機に、私も葬儀屋を、と思って始めたんですが、何ぶん不慣れなもので、多大な失礼があったんじゃないかと……申し訳ございませんでした。
奈央　どうなさるんですか？これから。

紳一郎　前の会社に戻ろうかと思っているんですけど、こんな時代ですから、雇ってもらえるかどうか……。
奈央　そうですか……。
紳一郎　ほんと、何をやってもうまくかないんですよね。
奈央　……それは、私も同じです。
紳一郎　え？
奈央　私の勘違いで、そちらにご迷惑かけてしまいましたし。
紳一郎　いやいや、それは……。
奈央（頭を下げ）こちらこそ、申し訳ありませんでした。
紳一郎　いえ。こちらの言葉が足りなかっただけですから。

少し間。

奈央　でも、急にひとりになると、人間寂しくなるものですね。
紳一郎　そうですよね。
奈央　同じもの食べてても、ひとりだと美味しく感じませんし。
紳一郎　ああ……。
奈央　あの、ちょっと待っててていただけますか？
紳一郎　あ、はい。

奈央は台所へ行くと、ビニールに入れられた大量の果物を手に戻って、

奈央　良かったら、持って帰ってください。
紳一郎　ああ……××ですか？
奈央　私ひとりじゃ食べきれなくて。
紳一郎（仕方なく受け取り）はい……ありがとうございます。
奈央　いえ。
紳一郎　それでは、私は、これで。
奈央　わざわざありがとうございました。

紳一郎は帰っていく。

奈央はカタログを手に居間へ。
ふと家族で過ごした日々を思い返す……。
十数年前の康子、薫、美晴、そして母が現れる。
それらを見ている現在の奈央。
×　×　×
美晴の入学式当日。ランドセル姿を写真に収めようとする母。
そこへ姉たちも写真に加わる。
×　×　×
果物を食べている姉妹。薫はダイエット中で食べれないでいる。
康子、奈央、美晴が去った後、母は内緒で薫に柿を剥いてやる。
×　×　×
康子が恋人と電話中。それをからかう薫と美晴。康子は奈央に静かにさせるよう指示。母はそれを微笑ましく見ている。
×　×　×
母の買ってきた浴衣を手に誰がどれを着るかでもめている姉妹。
母は浴衣を奪い取り「ケンカするなら着なくていい」と寝室へ。
姉妹たちは反省し、母の元へ謝りに行くが奈央だけが動かない。
×　×　×
奈央の高校受験当日。自信なさげな奈央を励ます母。安心させようとする康子。反対に、奈央をからかう薫と無邪気な美晴。
各々が家を出て行く。母はトボトボと歩いている奈央に向い、

母　大丈夫！ママの子なんだから！

母は奈央を見送るとまた家事を始めた……。
×　×　×
ここへ電話が鳴る。

奈央（出て）もしもし……うん奈央……うん、そっか……私、お姉ちゃんたちが父さんと話してるとき傍にいたんだけどね、なんか出れなかった……
（話を遮り）ごめん。あのさ父さん。お姉ちゃんたちとね、父さんが連絡取って、会ったりすることは全然構わないんだけど……私にはもう連絡

してこないで。縁は切ったと思ってるから。

一方的に電話を切る奈央。

奈央　……。

ここへ庭から浅野が現れる。

浅野　あの、この前、靴、忘れちゃって、ここに。
奈央　……。
浅野　ないですかね？あれ高かったんですよ。
奈央　……ほんとバカだよね、ぽんちゃんて。
浅野　ごめんなさい……。
奈央　……ほんと、バカ。

またも、電話が鳴る。
奈央はそれに、出ようとはしない……。

浅野　え、出ないんですか？
奈央　……。

膝を抱え、頑な奈央……。
暗転。

おしまい